

岩倉市民俗資料企画展

「暮らしの中のはかり展」

岩倉市図書館3階にある郷土資料室では、多数の民具を収蔵・展示しています。

民具とは、日常生活において長い間使われてきた道具のことをいいます。多くの民具は、日常生活の道具のため時代の変遷とともに忘れられ、消滅していきます。それらの民具は、過去から現在につながる生活を学ぶ上で貴重な資料です。

今回は、多くの収蔵品の中から「暮らしの中のはかり展」と銘打って「はかり」の文化について紹介します。

数をかぞえ、物の大きさを数値で表すこと、つまり「はかる」という行為は人間だけが持つ能力であり、文明、特に科学はそれによって発展してきました。長さ、重さ、体積や温度などをはかることは私たちの生活に密接に関わっています。

今回、今昔さまざまなはかりを展示し、はかりの変遷をご紹介します。

ー単位とはかりー

「1kmの道」、「5kgの米」…、もしこれらの言葉から「km」、「kg」といった単位をとったらどうなるでしょう。単位がなければ、その数字が何を意味しているか分からなくなります。また2種類のペットボトルがあり、どちらが大きいのか分からない時、私たちは内容量が印字されている表示を自然と見ます。1つは480ml、もう1つは500mlと書かれていれば、私たちはその表示を見て500mlのペットボトルが大きいと分かります。もし単位がないとどちらが大きいかを伝える時に困ります。「こちらの方が少しだけ大きい」と感覚で説明するだけでは、相手に正しく伝えることはできません。

世界共通でものを正確にはかるために、基準となるのが「単位」であり、決められた単位に基づいてはかるための道具が「はかり」です。単位は長い間、それぞれの国で決めた基準を元にしていましたが、経済活動が活発になり、国と国との貿易が増えてくると、違う単位を使っていると不便です。18世紀になって世界共通の単位を作ろうという動きがヨーロッパで起き、フランスで世界共通の単位として長さをメートル、質量をキログラムとして統一することが提案されました。それがメートル法です。メートル法はその後、精度向上のため改良が加えられながら、現在は「国際単位系(SI)」という形で国際的に発展、普及しています。

ー今も使われている日本の古い単位ー

長さ、体積、重さの3つの単位をあわせて「度量衡(どりょうこう)」といいます。日本で度量衡が制度として決められたのは、中国の単位をもとにしてつくられた大宝律令(701年)によってでした。日本では中世以降、長さは「寸(すん)」、「尺(しゃく)」、体積は「升(しょう)」、重さは「貫(かん)」を基本の単位として使ってきました。これらの単位はまとめて「尺貫法」と呼ばれています。この尺貫法は1959(昭和34)年からは基本的取引などでは使うことはできなくなりましたが、伝統的なものを作る時(大工、建具等)には尺貫法が便利なので、今でも使っています。

○長さの単位

1里(り)	36町(ちょう)	約3927m
1町	60間(けん)	約109m
1間	6尺(しゃく)	約1.82m
1丈	10尺	約3.03m
1尺	10寸(すん)	約30.3cm
1寸		約3.03cm

○重さの単位

1貫(かん)	1000匁(もんめ)	3.75kg
1匁	10分(ぶ)	3.75g
1分		0.375g

○体積の単位

1石(こく)	10斗(と)	約180ℓ
1斗	10升(しょう)	約18ℓ
1升	10合(ごう)	約1.8ℓ
1合	10勺(しゃく)	約180ml
1勺		約18ml

—長さをはかる—

長さについて

物の長さを正確にはかることは、産業の発展に欠かせないことでした。古来、長さをはかる時は親指の長さや指を広げた長さなど、人間の体を長さの単位として使っていましたが、時代が進むにつれてより精密で客観性の高い単位になっていきました。メートル法の制定により1メートルは「北極から赤道までの子午線の長さの1000万分の1」と定義され、それに基づく「メートル原器」が作製されましたが、現在は「光が真空中で299,792,458分の1秒に進む距離」として定義されています。

民具資料解説

○直尺（ちよくしゃく）

まっすぐな一片の材料に長さの目盛をしたもの。材質は竹、木、有機合成樹脂、黄銅、ステンレス鋼等。一般的に物差しと呼ばれる。



○巻尺（まきじゃく）

容器に巻き込んでおき、使用時に引き出すテープ状の物差し。材質は金属、繊維等がある。長いものは測量用、工場用として、短いものは洋裁用、医療用として使用。



○折尺（おりじゃく）

数片の材料を接続して折り畳みができる物差し。畳み尺ともいう。



○鯨尺（くじらじゃく）

鯨のひげで作ったことからの名称。江戸時代から、反物を測るのに用いられた和裁用の物差し。



—重さをはかる—

秤（はかり）の歴史

重さをはかるための秤は、エジプトにおいて紀元前5000年以上前に「天秤（てんびん）」として登場しました。近世までの秤は天秤と棹秤（さおばかり）が主であり、日本においては中世以降、天秤と棹秤の使用分野が分かれ、天秤は主に金銀、貨幣用として、棹秤は商用として使用されるようになりました。江戸幕府は、秤は経済や庶民の生活に関わる重要なものとして、日本を東西に分けて秤座（はかりざ）という専門の集団を作り、東は守随家（しゅずいけ）、西は神家（じんけ）に秤の統制を行う権限を持たせて厳重に管理しました。明治時代に入り、西洋の秤の導入や秤の改良が進み、しだいに秤の種類が増えて、小型で精密なものも登場してくるようになりました。

民具資料解説

○棹秤（さおばかり）

重量を計る目盛をつけた竿。竿につけた取っ手の紐を支点とし、先端に計量するものを、他の側に錘（おもり）の分銅を吊り下げ、錘を移動させて水平を保つ位置の目盛を読む。金銀など少量の量目をはかる銀秤や、魚などはかるものを載せる皿を吊るした皿秤も棹秤の一種。



○天秤秤（てんびんばかり）

中央を支点とする梃子（てこ）を用いて物の質量をはかる道具。竿の両端に皿を吊るし、一方にはかろうとする物を、他方に分銅（ふんどう）を載せて、竿が水平になれば物の重さを知ることができる。



○台秤（だいばかり）

荷台のついた重量物の秤で、対象物を荷台にのせてはかる形式になっている。当初は棹秤の原理を用いて分銅を使用していたが、やがてバネを利用して針で表示するようになり、今日の体重計のようなものになった。棹の先端にはかるものを吊るす鉤（かぎ）があり、その上に手で支えるための紐があり、そこを支点としながら錘を左右にずらしてはかる。



○繭秤（まゆばかり）

棹秤の一種。繭のような軽量なものをはかる道具。



○分銅（ふんどう）

表記された、あるいは約束の方法で表された質量と、そのものの質量が一致するおもり。中央がくびれた繭形（まゆがた）のもののほか、釣鐘形（つりがねがた）などがある。



— 体積をはかる —

枡（ます）について

穀物、食塩、酒、醤油など体積をはかる道具であり、主に人間の食料をはかる道具として用いられてきました。それは農民にとっては穀物の種をまくときに始まり、収穫量を計り、年貢を計算し、家族の翌年までの必要分や種子分を用意するため、一年を通じて欠くことのできないものでした。江戸中期までに固定した枡の種類は一合（ごう）、二合五勺（しゃく）、五合、一升（しょう）、五升、七升、一斗（と）の7種類。明治時代の政令で2升が制定され、7升がなくなりました。五合以上の枡には対角線状に弦鉄物（つるかなもの）と称する弦鉄（つるかね）があり、弦鉄がある枡を「つるかけ」、「つるかけます」と呼び、枡といえば「☐」と書かれるまで普及しました。

民具資料解説

○一合枡（いちごうます）

方形の枡で、1辺を2.1寸とし、深さ1.47寸に作る。本来、日常の穀類をはかるものだが、酒などの枡飲みも利用する。



○一升枡（いっしょうます）

方形の枡で容量は江戸時代から「64827立方分」、「方4寸9分」、「深さ2寸7分」であり、京枡と呼ばれてきた。材質はヒノキの柾目板（まさめいた）を主とするが、サワラなども利用する。



○斗桶（とおけ）

一斗枡の一種、正式の一斗枡は角枡。おおよその量をはかる場合には非公式の円筒形の斗桶が使用された。取っ手がついており、漆塗りになっていることが多い。雑穀の計量、穀枡などという場合もある。



○斗概（とがい）

枡で穀物をはかる時に盛り上がった分を掻きならす棒。枡掻（ますかき）、斗掻（とかき）ともいう。形状は棒状、板状があり、枡の大きさによって斗概の直径が指定された。



○弦鉄（つるかね、げんてつ）

枡の口に対角線状につけた鉄の板。江戸時代初期から五合以上の枡につけられていた。弦鉄をつける目的は斗概をかけるとき水平に掻（か）きとるため、形がゆがまないように補強するためともいわれる。



—参考文献—

- ・『日本民具辞典』 日本民具学会編集 1997年5月発行
- ・「身の回りでみつける 単位にくわしくなる絵事典」 PHP 研究所編 2006年11月発行
- ・『図解 単位の歴史辞典 新装版』 柏書房 小泉袈裟勝編 1989年12月発行